

本文生成プロセスから見た占領期検閲 ——岩波新書の検閲事例を中心に——

塩野 加織

1、GHQ 占領下日本における検閲 (→ppt 参照 ④、以下同様)

- ・ GHQ/SCAPによる検閲制度の概要 (期間、対象、組織、指針、方法、処分事由他)
- ・ プランゲ文庫、20 世紀メディア情報データベース
- ・ 占領政策の転換による検閲制度の変化 → 占領政策の一環としての検閲
- ・ 問題設定：検閲研究の蓄積を踏まえた課題点、検閲する/される関係性の再検証

2、事例①：言語改革をめぐる検閲資料 (→④)

石黒修「国語改革と教育」(『日本教育』1946 年 9 月)

↳ 米国教育使節団による改革提言への肯定的な評価

米国の対日教育使節団の報告書は、民主主義の伝統に高くかけられた理想を示す文書であり、報告書にあらはれた提案には、思慮のある日本人や他の国民にとって、全く新規に見えたり、意外の感をあたへるものは殆どあるまい、とマッカーサー元帥は声明の中でいつてゐるが、もし、さうした感を多少ともうけるものがあるとすれば、おそらく言語改革の一章であり、それにローマ字の採用を推奨してゐる点であらう。

しかし、あの報告書の全文を手にした人は、それが当然であり、ローマ字採用なども、当時新聞に要約されて報道されたやうな意味の、あるひはさう考へられるやうなものではなく、極くふくみのある示唆である。正直なところ、ながいあいだ、国語改革乃至は国語政策に微力をつくして来たわたしなども、ローマ字採用は理想として、ほとんど現実の、いはゆる国語問題の解決、そのための調査研究と方策運動に重点をおいて来た。それでも、相当の反対を受け、殊に太平洋戦争の半ばからは、発表の自由を封じられたかたちになつたのである。【したがつて、使節団のローマ字勧奨を、日本における過去の国語運動史、国情、国民の動向に対する認識の不充分さにもあるやうにさへ感じた。いはゆる第三者、特に国語改革に好意を示さなかつた人々は、さう感じ、甚だしくは、言語による米国の日本領有化のあらはれであるかの口ぶりをするものさへあつた。】

(註) 言語ではなく、文字といふべきであるが、この混同は、日本人の有識者といはれる人々にも多い。

しかし、これは当時の新聞の記事が短かいため、ある意表に出たものによる誤解、曲解からの印象にすぎない。報告書の全文を読めば、これが氷解することは前に述べた通りである。

ここに国語改革の重要性を繰り返すならば、日本民主教育の新憲法ともいふべき、この報告書にもいつてゐる通り、国語改革は、實際上、初等学校から大学に及ぶ教育案のあらゆる部門にその影を投じてゐる。そして、もしこの問題に満足な解決が見出されないなら幾多の教育目標の完成は極めて困難となるのである。

(石黒修の文章に対する検閲処分)

- ・ 指示内容：指定箇所を部分削除
- ・ 処分事由：アメリカ合衆国に対する敵意
- ↓
- ・ 著者側の対応：指定箇所のみ削除して刊行。

- ・編集後の本文：

処分箇所＝「言語による米国の日本領有化のあらわれ」

通過箇所＝「これは誤解、曲解からの印象にすぎない。」

↓

「アメリカ教育使節団は、いみじくもその報告書に、これを適切的確に指示している」

「極めて謙虚な遠慮がちなものであり、ヒューマニズムのあらわれであることは、これを読んだ人のだれでも感ずるものである」

- ・米国教育使節団報告書内容の普及←→検閲システムが果たした役割
CIE←→CCD との関係性

3、事例②：アジア認識をめぐる検閲資料（→㉒）

津田左右吉『支那思想と日本』（岩波書店 1948 年 2 月）

↳ 岩波新書の再版。「東洋文化」に対する批判的見解と自身の中国認識

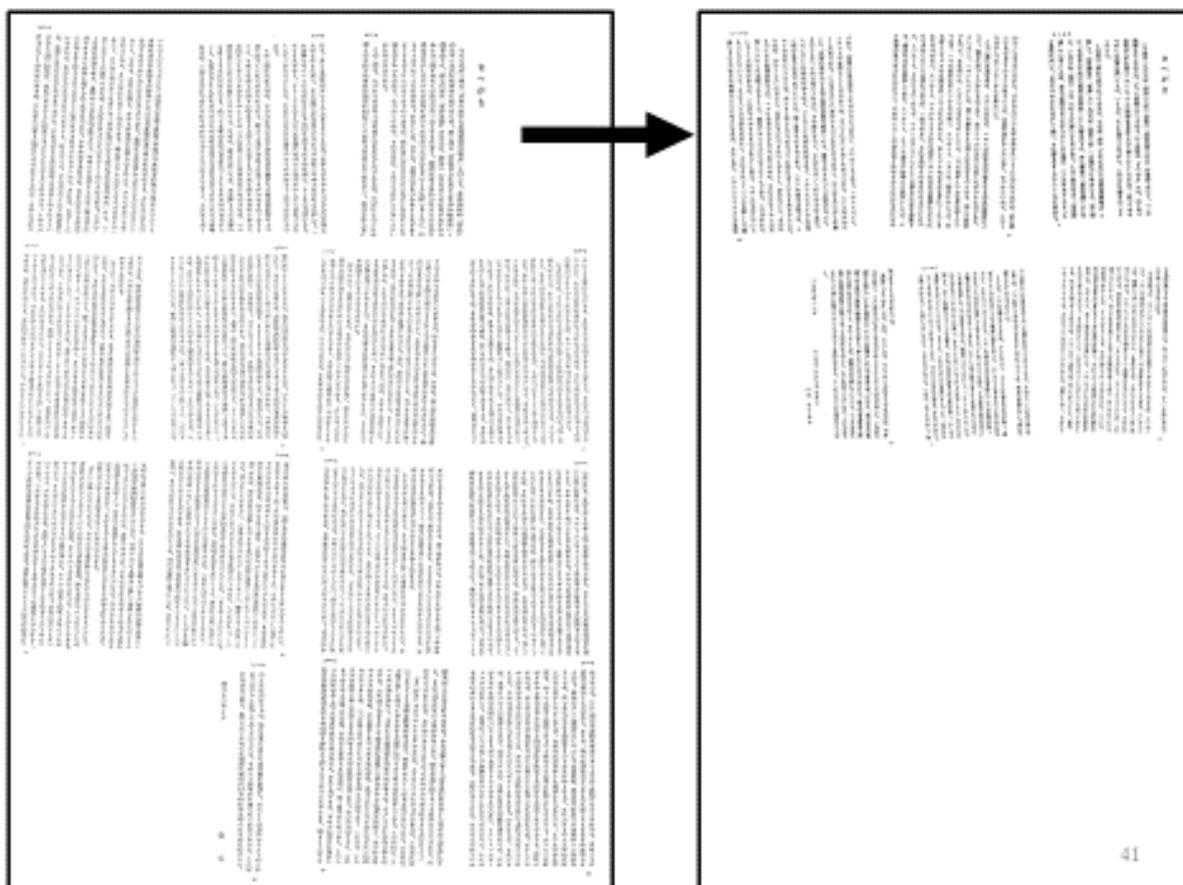
なほ世間では、これから後の日本が支那に対して政治的経済的または文化的に活動しなければならぬ、もしくはそれらの方面において両民族が提携しなければならぬ、といふことと、日本の過去の文化と支那のそれとを同じ一つの東洋文化としてみるといふこととが、混雑して考へられてゐるのではないかと思はれるが、この二つはもとく全く別のことである。【日本と支那との文化が過去にどういふ関係であつたとしても、それにはかゝらず、これから後は、日本が支那に対していろいろの方面にはたらくことが絶対に必要となつて来た。日本は今、支那人の抗日思想をうち破り、両民族が、支那に於いて、互に手をつないではたらくことのできるやうな新しい状態をつくり出さうとして、いのちがけの努力をしてゐる。】しかしそれには、日本人と支那人とが、上に述べたやうにして別々の文化をかたちづくり別々の民族性を養つて来た、全くちがつた二つの民族であることを、十分に知つてかゝらねばならぬ。

【「まへがき」でかういふことをいふのは、ふさはしくないやうでもあるが、この書に説いてあることと密接な関係があるので、率直にわたくしの考を述べたのである。日本は今、支那に対して行つてゐる大なる活動に向つてあらゆる力を集中してゐる。この活動は、すべての方面に於いて、十分にまた徹底的に行はれねばならぬ。さうしてそれが行ひ得られるのは、上に述べたやうにして歴史的に発達して来た日本人に独自の精神と、世界性を有つてゐる現代文化、その根本となつてゐる現代科学、及びそれによつて新に養はれた精神のはたらきとが、一つに融けあつたところから生ずる強い力の故である。ところが、この日本の状態と全く反対であるのが今日の支那の現実の姿である。今度の事変こそは、これまでの日本と支那との文化、日本人と支那人との生活が、全く違つたものであり、この二つの民族が全く違つた世界の住民であつたこと、それと共にまた、日本人に独自の精神と現代文化現代科学及びその精神とが決して相もとるものではないことを、最もよく示すものといはねばならぬ。現に支那に於いて諸方面に活動し、いろいろの意味いろいろのしかたで支那人と接触してゐる日本人には、そのことが明らかに知られてゐるであらう。この書に収めた二篇は、要するにこの明かな現在の事実の歴史的由来を考へたものに過ぎない。】

昭和十三年十月
著者

(津田の著作に対する検閲処分)

- ・ 指示内容：指定箇所を部分削除
 - ・ 処分事由：記載がなく不明（大東亜プロパガンダ、好戦的プロパガンダ、中国批判等か）
- ↓
- ・ 著者側の対応：指定箇所の削除＋他箇所の削除・書き換え



- ・ 初版 1938. 11→（敗戦後、再版のために検閲届出→削除指示処分）
→1947. 12 再版「まへがき」脱稿
→1948. 1 印刷（伝票）
→再版発行 1948. 2（奥付）
※事前検閲から事後検閲への過渡期に相当
- ・ 「まへがき」を書き換えるということ：言説内容の再文脈化、主体の再配置

4、事例③：再版図書に対する検閲資料（→㊦）

- ・ 岩波新書の変遷：

赤版（1938～46）→青版（1949～77）→黄版（1977～87）→新赤版（1988～）

敗戦後～青版までの再版（20点23冊）¹

『奉天三十年』上下、『支那思想と日本』、『万葉秀歌』上下、『雪』、『哲学入門』、『ミケルアンジェロ』、『海』、『日本美の再発見』、『学生に与ふる書』、『雷』、『零の発見』、『芝居入門』、『日本の数学』、『余の尊敬する人物』、『ファラデー』、『禅と日本文化』、『地震の話』、『アメリカ発展史』上下、『ナニセン伝』、『宇宙と光』

¹ 鹿野政直『岩波新書の歴史』（岩波書店、2006年5月）。なお同書において鹿野は、青版・新赤版とも、それぞれ二期に分けて検討している。

岩波新書を刊行するに際して

岩波茂雄

天地の義を輔相して人類に平和を与へ王道楽土を建設することは東洋精神の神髓にして、東亜民族の指導者を以て任ずる日本に課せられたる世界的義務である。日支事變の目標も亦茲にあらねばならぬ。世界は白人の跳梁に委すべく神によつて造られたるものにあらざると共に、日本の行動も亦飽くまで公明正大、東洋同義の精神に則らざるべからず。東海の君子国は白人に道義の尊きを誨ふべきで、断じて彼等が世界を蹂躪せし暴虐なる跡を学ぶべきでない。

今や世界混乱、列強競争の中に立つて日本国民は果して此の大任を完うする用意ありや。吾人は社会の実情を審かにせざるも現下政党は健在なりや、官僚は独善の傾きなきか、財界は奉公の精神に欠くところなきか、また頼みとする武人に高邁なる卓見と一糸乱れざる統制ありや。思想に生きて社会の先覚たるべき学徒が真理を慕ふこと果して鹿の溪水を慕ふが如きものありや。吾人は非常時に於ける挙国一致国民総動員の現状に少からぬ不安を抱く者である。

明治維新五ヶ条の御誓文は啻に開国の指標たるに止らず、興隆日本の国是として永遠に輝く理念である。之を遵奉してこそ国体の明徴も八紘一字の理想も完きを得るのである。然るに現今の情勢は如何。批判的精神と良心的行動に乏しく、やゝともすれば世に阿り権勢に媚びる風なきか。偏狭なる思想を以て進歩的な忠誠の士を排し、国策の線に沿はざるとなして言論の統制に民意の暢達を妨ぐる嫌ひなきか。これ実に我国文化の昂揚に微力を尽さんとする吾人の窃かに憂ふる所である。吾人は欧米功利の風潮を排して東洋道義の精神を高調する点に於て決して人後に落つる者ではないが、驕慢なる態度を以て徒らに欧米の文物を排撃して忠君愛国となす者の如き徒に与することは出来ない。近代文化の欧米に学ぶべきものは寸尺と雖も謙虚なる態度を以て之を学び、皇国の発展に資する心こそ大和魂の本質であり、日本精神の骨髓であると信ずる者である。

吾人は明治に生れ、明治に育ち来れる者である。今、空前の事變に際会し、世の風潮を顧み、新たに明治時代を追慕し、維新の志士の風格を回想するの情切なるものがある。皇軍が今日威武を四海に輝かすことかくの如くなるを見るにつけても、武力日本と相並んで文化日本を世界に躍進せしむべく努力せねばならぬことを痛感する。これ文化に関与する者の銃後の実務であり、戦線に身命を曝す将兵の志に報ゆる所以でもある。吾人市井の一町人に過ぎずと雖も、文化建設の一兵卒として涓滴の誠を致して君恩の万一に報いんことを念願とする。

曩に學術振興のため岩波講座岩波全書を企図したるが、今茲に現代人の現代的教養を目的として岩波新書を刊行せんとする。これ一に御誓文の遺訓を体して、島国根性より我が同胞を解放し、優秀なる我が民族性にあらゆる発展の機会を与へ、躍進日本の要求する新知識を提供し、岩波文庫の古典的知識と相俟つて大国民としての教養に遺憾なきを記せんとするに外ならない。古今を貫く原理と東西に通ずる道念によつてのみ東洋民族の先覚者としての大使命は果されるであらう。岩波新書を刊行するに際し茲に所懐の一端を述ぶ。
昭和十三年十月靖国神社大祭の日

・参考) 青版①

岩波新書の再出発に際して

岩波新書百冊が刊行されたのは中日事変の始まった直後から太平洋戦争のたけなわ頃におよぶ、かの忘れえない不幸の時期においてであった。日々につのってゆく言論抑圧のもとにあつて、偏狭にして神秘的な国粹思想の圧政に抵抗し、偽りなき現実認識、広い世界的観点、冷静なる科学的精神を大衆の間に普及し、その自主的態度の形成に資することこそ、この叢書の使命であった。

われわれは、かの不幸な時期ののちに、いまだかつてない崩潰を経験し、あらゆる面における荒廢のなかから、いまや新しい時代の夜明けを迎えて立ちあがりつつある。しかも、当面する危機はきわめて深く、状況はあくまで困難である。世界は大いなる転換の時期を歩んでおり、歴史の車輪は対立と闘争とを孕みながら地響きをたてて進行しつつある。平和にして自律的な民主主義日本建設の道はまことにけわしい。現実の状況を恐ることなく直視し、確信と希望と勇気とをもってこれに処する自主的態度の必要は、今日われわれにとって一層切実である。ここに岩波新書を続刊し、新たな装いのもとに読者諸君に贈ろうとするのも、この必要に答えて国民大衆に精神的自立の糧を提供せんとする念願にもとづく。したがって、この叢書の果すべき課題は次のごとくであろう。

世界の民主的文化の伝統を継承し、科学的にしてかつ批判的な精神を鍛えあげること。封建的文化のくびきを投げすてるとともに、日本の進歩的文化遺産を蘇らせて国民的誇りを取りもどすこと。

在来の独善的装飾的教養を洗いおとし、民衆の生活と結びついた新鮮な文化を建設すること。

幸いにひろく読者の支持をえて、この叢書が国民大衆の歩みとともに健康なる成長をとげることが心から切望するものである。(一九四九年三月)

・参考) 青版②

岩波新書について

岩波新書赤版百冊が刊行されたのは、日中戦争の始まった直後から太平洋戦争たけなわのころに及ぶ、忘れえないあの苦難の時期においてであった。当時の偏狭な国粹思想の横行に対抗して、偽りなき現実認識と、広い世界的観点と、冷静な科学的精神とを普及し、日日につのってゆく言論抑圧の下に、なお、ヒューマンイズムの精神を保持し、国民の自主的な生き方に資したい、という念願こそ、この双書創刊の趣旨であった。

戦争は惨憺たる敗戦をもって終わり、その荒廢の中から立ちあがって、私たちは新しい時代に向かつて発足した。戦時下に一次休刊の止むなきに至っていた岩波新書も、装幀を赤版から青版に改め、一九四九年、希望をもって再出発することとなった。当時なによりも必要であったのは、敗戦後の厳しい現実を臆することなく直視し、広い視野と冷静な認識とをもって、激動の時代に立ち向かう勇氣であった。自主的な精神の確立は、民主主義の時代を迎えて一層欠くことのできない要件となった。「現代人の現代的教養」という創刊の標語も、この新たな現実の中で、さらに進んだ積極的意味をもつこととなった。かくて再出発以来二十余年、時代の課題を次ぎつぎ追いつきながら、政治・経済・社会・文化・自然科学等の分野にわたって、七百五十余点を刊行しつづけて今日に至った。

いまや一九七〇年を迎え、戦後の歴史はふたたび大きく転回しようとしている。国際的にも国内的にも未曾有の変動を経て、今日私たちは、戦争直後とは全く一変した政治的・社会的現実に当面し、かつてない深い思想的混迷をも迎えている。知らねばならぬこと、考えねばならぬ問題は山積して、日日、私たちの前に立ちだかっている。しかし、その中であつて、知性をもってこの時代閉塞を切り拓こうと努めている人々、この困難な時代を真摯に生き抜こうとしている人々は、決して少数ではない。私たちは、その人々を読者とし、その人々の要請にこたえる精神の糧を提供することこそが、今日この双書の果さねばならない課題であると信じ、この双書の使命を思いかえしつつ、さらにさらに前進をつづけたいと思う。読者の御指示を心から期待する。(一九七〇年三月)

- ・参考) 岩波全書 (→)

岩波全書発刊に際して

時艱にして朝に諍臣なく野に義人なく举世滔々義をすて利に走りて恥づるを知らず輦轂の下薫化の重責を負へる者に縲紲の徒を出すが如きに至つては邦家の憂患之に過ぐるものはない。吾人は凶書に衣食する市井の一素町人に過ぎずと雖も先憂後楽君国に微力を捧げんとする奉公の至情に於ては敢て人後に落つるを潔とせざるもの、一の凶書一の雑誌を公にする場合と雖も常に出版の第一義に即し、未だ曾て学術と社会とを思はざることなかりしは自ら顧みて天地に恥ぢざる所である。創業二十年の記念として吾人は曩に全出版物に互る特売を行ひしが今茲に継続せる記念事業として岩波全書を刊行せんとする。岩波文庫が東西古典の普及を主眼とするに対し岩波全書は現代学術の普及を目標とする。惟ふに我国学界の研究往々泰西の壘を摩するあるも学術全般に互る社会的水準は欧米のそれに及ばざること尚遠き感なきを得ない。岩波全書は現時の日本社会に於ける此の欠陥を補はんことを志すものである。在来の普及書のやゝもすれば知識の正確を欠く感あるに鑑み岩波全書は内容を絶対的に信頼し得るものたらしめん爲め学術百科それぞれの最高権威者に懇請してその敏感熾烈なる学者の良心に委ね、豊富なる知識を平明なる表現に圧縮し之を簡易なる形式に盛りて定価を廉にし自由分売以て普及に便せんとする。岩波書店は最高至深の研究物を公刊せんとする従来の態度に拍車を加ふると共に此の際更に岩波全書に努力を傾け学術普及の新領域に進出せんことを期する。国歩艱難の秋、国防軍備固より欠く可からざるも学術の普及と相俟つて始めて新日本の光輝は発揚せらるべし。吾人の此の企画も学術立国の趣旨を体し時難に課せられし吾人の責務を果さんとするの微衷に出づるのみ。敢て同憂好学の士の支持を仰ぐ。(昭和八年十二月)

参考文献)

- 植田康夫・紅野謙介・十重田裕一編『岩波茂雄文集』全3巻(岩波書店、2017年)
- 鹿野政直『岩波新書の歴史 付・総目録 1938～2006』(岩波書店、2006年)
- 日本出版学会・出版教育研究所共編『日本出版史料』1-10(日本エディタースクール出版部、1995～2005年)
- 鈴木登美・十重田裕一・堀ひかり・宗像和重編『検閲・メディア・文学——江戸から明治まで』(新曜社、2012年)
- 谷瑛子『占領下の児童出版物とGHQの検閲——ゴードン W. プランゲ文庫に探る』(共同文化社、2016年)
- 山本武利『占領期メディア分析』(法政大学出版局、1996年)
- 山本武利編者代表『占領期雑誌資料大系』文学編全5巻(岩波書店、2009～2010年)
- 山本武利『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波書店、2013年)

参考資料提供)

- 岩波書店
- メリーランド大学図書館プランゲ文庫
- NPO 法人インテリジェンス研究所

(※本報告は、JSPS 科研費 JP16K13196 の助成を受けた研究成果の一部である。)